

愛知の博物館

No. 32



蓬 菜 鏡

目 次

- | | | |
|-------------------|-------|---|
| ◦ 新会長あいさつ | 奥田信之 | 2 |
| ◦ 観る一人として | E · H | 3 |
| ◦ 「やきもの」の分類 | 不二門義仁 | 4 |
| ◦ 犬山城の天守閣の村瀬太乙の遺品 | 丹羽文雄 | 7 |

会長あいさつ

愛知県陶磁資料館館長 奥田信之

私は去る5月の愛博協総会において会長に選任され、その責務の重大さを感じております。愛博協が昭和39年発足しまして、以来17年間、徳川美術館館長そして愛知県文化会館美術館の館長が会長を務められ、当協会の基礎がためをされました。本当にご苦労様でしたと深く感謝申し上げる次第であります。

近年、人間生活が経済の問題だけでなく、人間の生き方をも含めて考えるということで、生涯教育への関心が高まっています。

当然のことながら博物館等に期待されるものも大きいと思います。

さて、博物館等を構成する要素は、もの、ひと、ば、の三つであります。それも 単なるものであり、ひとであり、ばではないと考えます。ものは調査され、研究されて、その意義付けがされ、価値を認められた資料であるといえます。ひとは資料の調査研究により、展示を通して 教育・普及の役割を果たす人でありますし、またそれを利用する人をも含んだ ひとであるといえます。 ばはその施設を活用し、活動する機関としての場でなければならないと考えています。

この三つの要素が有機的に結びついた活動が博物館等の活動であると思っています。

このような個々の館活動が効果的に展開されるためには、館相互の横の連携が重要であり、博物館協会の役割は、この点にあるのではないかといえます。相互の情報交換の場であり、運営上の問題点を研究協議する機関として機能すべきであると思います。

幸い、立派な役員さんや実行委員の方たちが選任されていますので、十分協議をいたしまして、よりよい協会になるよう努力して参ります。

加盟館、園の皆さん格別のご支援をお願いして、御挨拶といたします。

昭和57年度愛知県博物館協会役員名簿

役職名	館名	代表者名	役職名	館名	代表者名
会長	愛知県陶磁資料館	館長 奥田信之	理事	徳川美術館	館長 徳川義宣
副会長	奥三河御園高原 自然学習村	所長 金子功	〃	名古屋市博物館	館長 浅井嶽一
理事	荒木集成館	館長 荒木実	〃	博物館明治村	館長 関野克
〃	熱田神宮宝物館	館長 岡本健治	〃	知多市民俗資料館	館長 竹内敏雄
〃	財団法人 日本モンキーセンター	所長 大沢済	監事	愛知県文化会館	館長 片山和夫
〃	市立名古屋科学館	館長 佐藤知雄	〃	財団法人 岩田洗心館	理事長 岩田不二子

観る一人として

E · H

手もとの岩波国語辞典（第二版）によると、○ちえ（知恵・知慧）—物事の筋道がわかりうまく処理して行ける能力 ○ちしき（知識）—ある事柄についていろいろと知ること。その知られた内容とある。

ここでは、「知識」がより外から与えられる色彩を持つのに対して、「知恵」はより内からに根ざしていることに注意しておきたい。

博物館・資料館担当者の悩みの一つは、展示品がその時代なり地域なりの生活や文化から切離され、「死せるもの」として展示されていることがある。「死せるもの」を「生けるもの」とすることによって、「観る人」の理解が深まる。生けるものとするとは、人の息吹を感じめることである。より良い状態で保存することと、より良く理解してもらいたいという希望とは、往々、引裂かれ矛盾する。

博物館を訪れる心ある人は、「もの」をできるだけその背景の下に、産出し使用した人とのかかわりにおいて、全体の中の一つとして理解してもらいたいという担当者の切ないまでの願いを痛いほど感じる。触ってもらいたい、動かしてもらいたい、使ってもらいたいと思うこともあるという。まことに「死せるもの」を「生けるもの」とする為の、博物館担当者の悩みは尽きない。しかしこの悩みの底には、ものをものとしてのみ理解させたいという考えがあるのではないか。つまり「知識」として「観る人」に外から注入する姿勢はないか。勿論それは大切なことであるが、今一つの考え方もあるようと思われる。

博物館を訪れる人は、そこに展示されている「もの」を通じて、それを使用した人と「出会い」をする。この場合、「交わり」とは、「観る私」が展示品を通じてそのものを産み出したり、使用した人に身をすりよせ理解しようとする精神的営みである。他方、「交わり」は、「観る私」の内に、今迄知ることのなかった自分を発見することでもある。恐らくそれは偶然であろうし、まして新たに発見された自分を自覺的に、永続的に身についたものにすることは、滅多に望めぬことかも知れない。

ここに熟さない形で綴ってきたことは、博物館が「知識」を外から与える場であるだけでなく、「観る人」にとって、「死せるもの」を媒介として内から発する何かが、「もの」と呼応して自らに回帰する「出会い」と「交わり」の場でもあるのではないかと考えてみたまでのことである。そのようなことを「知恵」の視点と言ってみたい。

大正教養主義の背景のもとに「古寺巡礼」をした和辻哲郎には、西欧化の中で日本人としての自らの立脚点を、水源にさか上って確かめたいというやみ難い希望があった。

「大和古寺風物誌」の背後には、昭和初期左翼運動の崩壊と転向という、精神の荒廃の原野からの再起を図る亀井勝一郎がいる。

彼らは、それぞれの時代背景を持つつも、現に生きている人としての自らの眼で、内から発するものの導きのまま、今は沈黙と荒涼の世界に死せるものとしての身を横たえていた仏に接した。信仰の対象としての仏像が、一度は死して、今や美的対象としてよみがえったといえ

ようか。そこには、「出会い」、「交わり」があり、「語らい合い」が存在した。

博物館のガラスのケースの中にある展示品は、どこまでも「死せるもの」であろう。しかし、ガラスのケースごとに観る人は現に生きているのであり、「もの」は「ひと」によって生命を得るし、時空をこえてよみがえるのではなかろうか。

あらためて、より困難な課題であるが、博物館関係者は、時には「観る人」の立場にたち、「知恵」の視点 — とりわけその多様な対応を考慮してほしいと思うのである。

「やきもの」の分類

不二門 義仁

数千年前、人類は「やきもの」を生み育ててきました。それ以来、やきものは生活に欠くことのできないものになりました。わたしたちの回りにあまりにも多くのやきものが使われていることにあらためて驚かされます。

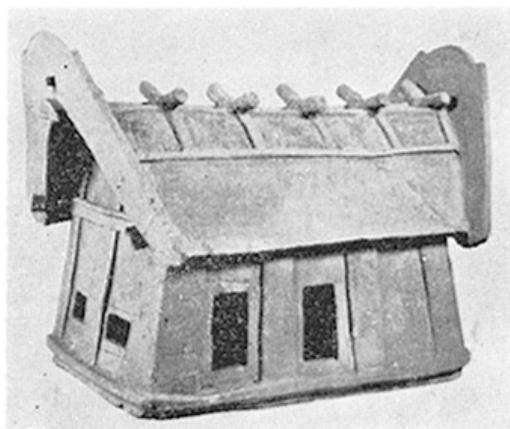
茶碗、皿、丼、コーヒーカップ、土なべの食卓用品、人形や動物など陶製玩具、更に瓦、タイル、衛生陶器などの建材用品、磚子などの電磁器など、やきものない生活は考えられません。一般に日常生活を基盤として発達してきました。原料も天然材料をそのまま活用し、焼成も自然の燃焼方法を利用しています。このようなやきものを一般に陶磁器の広義にはオールド（クラシック）セラミックスといいます。

通常は次のように分類しております。

1. 土 器

土器は人類が初めてつくったやきもので、焼成温度550~900°C位で焼かれ、素地は橙から茶色でいわゆる素焼であります。一般に有色で多孔質なため、吸水性があり、不透光性です。たたくと濁音を発し、強度も弱い。古くは縄文土器、弥生土器、土師器、現在はいぶし瓦、赤煉瓦、こん炉、植木鉢、ほうろく、埴輪（写真1）、更に博多人形などがあります。

一般に液体容器には向きですが、乾燥した暑い西アジアの土地では素焼の壺や水差しは生活必需品です。これに水を満たして置くと、水は素地をくぐって表面にしみ出して、たえず蒸発をつづけ、表面から熱を奪いますから、壺の水は常に冷たいままです。また水は通すがある種の細菌は通さないため、細菌の濾過材としても利用されています。一方土器質のものに施釉されたものに楽焼、三彩、ペルシャ陶器があります。



(写真1) (埴 輪)

2. 陶 器

陶器は普通1,100~1,300°Cで焼かれます。白色のもの、有色のものがあり、不透光性です。吸水性があり、たたくと濁音を発します。強度もあまり強くありません。茶陶で使われる志野、織部（写真2）、灰釉陶器などの赤津焼、美濃焼、長石釉の唐津焼、萩焼などがあります。そのほかに薩摩焼、粟田焼、出雲焼、笠間焼、水戸焼、大桶焼などがあります。



(写真2) (織 部)

3. 灰 器

灰器は1,000~1,300°Cで焼かれています。無釉のものから始まって、徐々に高温でやくようになり、焼成中の焚木の灰がかかり、素地中の珪酸質と融合して素地の表面にガラス質のものが出来たと思われます。これを自然釉といい「やきもの」の釉の発見の源であろうといわれています。一般に素地は有色で吸水性はありません。不透光性で、たたくと清音を発します。古くは僧行基が製陶技術を伝えたということで、行基焼ともいわれています。朝鮮半島から伝来したといわれている須恵器も灰器に分類されています。常滑焼（写真3）、万古焼、伊賀焼、備前焼、信楽焼、高取焼、相馬焼、益子焼、温故焼、赤膚焼、朝日焼などがあります。



(写真3) (常 滑 烧)

磁器は1,200~1,450°Cで焼かれています。一般に白色で吸水性がなく、ガラス化が最も進んでいて透光性を示します。たたけば金属音を発し、強度が大きく破断面は貝殻状を示します。また電気の不良導体で化学的耐蝕性、耐熱性などに富んでいます。磁器は豊臣秀吉の朝鮮出兵時に、李三平という陶工をつれて帰り、佐賀県有田町の泉山で陶石を発見して焼いた（1616年）のが始まりといわれています。その頃陶器を焼いていた瀬戸は、有田製の磁器に取って替られるようになります。徐々に衰退していきました。そこで瀬戸では加藤民吉を有田へ派遣して、磁器製造の技法を取得させ、1807年に磁器の製造を開始したといわれています。



(写真4) (磁器のいろいろ)

第二次大戦の末期になると軍需物質優先政策で、急速に先活必需品は日本の町から姿を消していきました。瀬戸の陶工はいち早く鉄、アルミ製品に替る「せともの」の研究に取り組みました。磁器質ナイフ、フォーク、栓抜き、ストーブ、ボタン、帽章、陶貨更に釘まで作られたと言われています。現在の磁器は飲食器、電磁器など高級品に使用されています。

瀬戸焼、みの焼、有田焼、清水焼、波佐見焼、九谷焼、砥部焼、渋草焼、出石焼などの産地があります。(写真4)

陶磁器の分類を焼成温度と産地を図1に示します。

更に組成と陶磁器を表わしたのが図2で、原料の調合にも違いがあることがわかります。

やきものはもともと耐酸性、絶縁性、耐熱性などにすぐれたものですが、近年エレクトロニクス技術の発達、原子力発電、宇宙開発など新たな産業の進展につれ、より高度で多機能性を持った材料が要求されています。

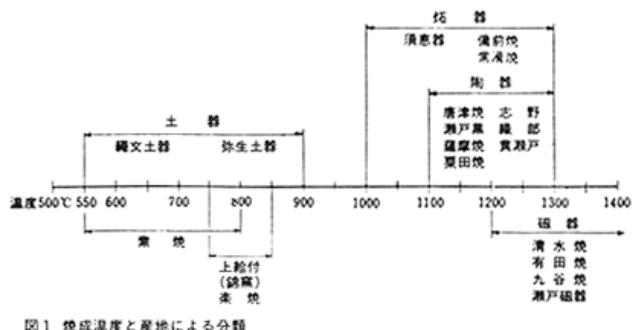


図1 焼成温度と産地による分類

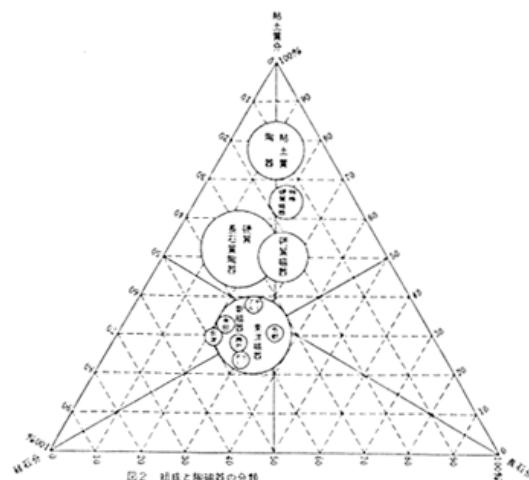
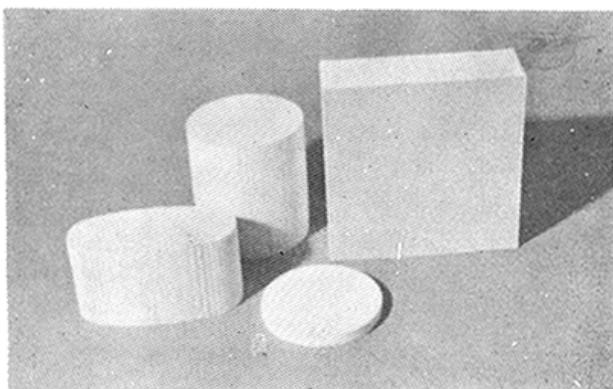


図2 組成と陶磁器の分類

従来のオールドセラミックスでは対応できないため、特殊な工業材料を人工的に合成又は精製したアルミナ、炭化珪素、窒化珪素、ベリリアなどの材料を特殊な成形、更に特殊な条件下で焼成するなどオールドセラミックスでは考えられない方法で製造されています。用途もICやLSIの基板、セラミックフィルター、ハニカム構造体（写真5）、圧電素子、フェライト、バイト、各種センサーなどがあります。また最近注目されているセラミックスエンジンは実用化が図れれば約30%の省エネルギーができるといわれています。更にスペースシャトルが宇宙からの帰還時の大気摩擦熱約1,400°Cから宇宙飛行士ともども保護したのは、まだ記憶に新しいと思います。

(写真5)



(ハニカム構造体)

やきものの分類には、これらのはかに、
“せともの”などのように産地別、織部釉などのように釉薬別、アルミナ磁器などのように組成別、花器などのように用途別、井などのように姿形別、素地の緻密度による方法などいろいろあります。最近の科学技術の進歩はめざましいものがあり、前記したように画一的に分類することが困難になっております。一例として磁器と金属の合いの子の切削工具などに利用されているサーメット、サファイヤなどの合成宝石、酸素センサーにも利用されているジルコニア磁器、レーザーにも利用されているルビーの単結晶など複合化、単一化、多機能化が進み、古典的分類では間に合わなくなりつつあります。やきものは日常生活を基盤として育ち、現在ではあらゆる産業で使用され、なくてはならない素材として成長し、また開発されています。

<愛知県陶磁資料館 主任学芸員>

犬山城天守閣内の村瀬太乙遺品

丹 羽 文 雄

村瀬太乙は享和3年7月7日、岐阜県武儀郡上有知村（今の美濃市）に出生した。通称は泰一と呼ばれ、次男であるが「太乙」と改名した年月日は分らない。年若くして村瀬藤城（美濃の文人）の紹介で京都へ出、漢学者頼山陽に師事した。山陽歿年の時一旦郷里に帰り、その後、天保8年（1837）35才の時名古屋へ出て、子弟に漢学を教えていた。弘化元年（1844）太乙が42才の時、犬山城主第8代目成瀬正住候に招かれて儒官として仕え、犬山に移り、犬山藩の学問所、敬道館教授となつた。

太乙は殿様の前でも平氣で奇言奇行をやらかしたこと、これまた面白く世に伝えられている、生来は酒を好まず大の煙草好きで、その愛用のバカデカイ大キセルも城内に展示してある。

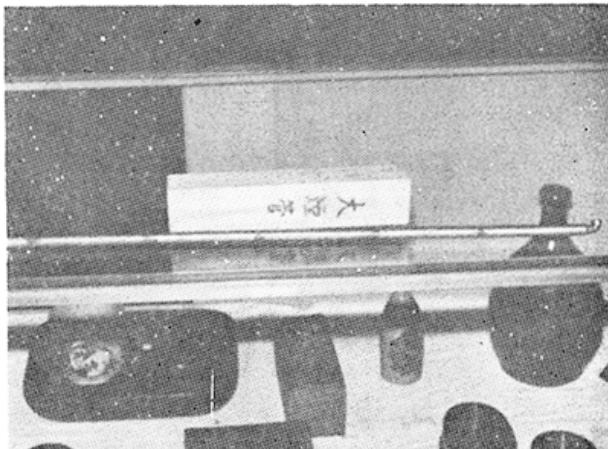
詩も、書も、画も、殊に人物を描いた漫画風の作品は非常に多く、今なお愛観珍藏せられている。

思うにこの人は、一代の学者であつて、しかもその一生は奇人として奇言奇行、よくその意心を失わず、天衣無縫の達人として生涯を全うしたと言われている。彼は明治14年79才で歿し、犬山市の徳授寺が菩提寺である。彼の100回忌が菩提寺の住職らの呼かけで、昭和55年7月に関係者や、犬山市内の太乙ファンにより法要も行なわれ、太乙を偲び語り合い、墓参りも行なわれた。

犬山市が昭和38年10月岐阜県郡上郡八幡町の「おもたか家」（故水野柳人）から、太乙の遺品の数々を譲り受けた。この遺品の大部分は鵜沼町（現各務原市）の阿部有三（号城山）の家から水野柳人が全部買ひうけて、八幡町へもって行ったものである。阿部城山は太乙の眞の門人だったので、猪の子町（犬山市）の村瀬とも（太乙の次女）のところから手に入れて、大切に持っていたものである。それが再び犬山市へ戻り、現在犬山城内に一部展示してある。

市所蔵は、太乙の次女ともが整理したものと、ともの相続人となった參女のむねが整理した遺品の次の一部である。

太乙の77才祝賀で門下生たちの祝詩一巻、太乙の夫医之為言也という原稿疾医文書、太乙の



家宝だった定紋付鎧ひと揃、大木刀一振、大煙管、弁当箱、大筆、矢立、目鏡、如意、定紋入陣笠、定紋付塗たらい、煙草箱、太乙の書画、犬山焼煎茶碗2個、その他所蔵品には書籍類が数多くある。頬山陽の書籍や、それに関連したものが目立ち、日本外史全巻など古書類が多い、又彼の遺品展が昭和55年11月から、56年3月末までアメリカのルイジアナ州ニューオリンズの美術館で作品展も開かれたこともあり、アメリカの蒐集家の間で、彼の作品が話題になっている。当然地元でも、彼の作品を個々に珍藏されている作品を持寄って作品展が開催されることもある。

犬山城天守閣

表紙写真

蓬萊鏡1面 (室町時代)

径 14.8cm

鏡は古くより、その神秘性と相まって重要視されて来ました。三種の神器の1つとして伝えられて来ているのも、祭器や宝物等の権力の象徴として尊ばれていたことを物語っています。

わが国に大陸から鏡が伝来したのは弥生時代中頃といわれています。この時代の鏡は、中国朝鮮の鏡あるいはその倣製鏡で、古墳時代に入り、日本独自の文様である直弧文鏡・家屋文鏡・狩獵文鏡などが作られる様になりました。その後、仏教文化の流入や遣唐使などにより唐鏡がもたらされ、仏教文化の中で盛んに使用されました。平安時代中頃に入ると、唐鏡と日本の文様を鋳出した和鏡との中間様式の瑞花双鳳鏡などの唐式鏡が出現し、平安時代後期頃には純然たる和文様の和鏡が発生してきます。鎌倉時代には文様も写実的な要素が強くなり、説明的で構図も類型化し、巨巖上に大きく枝をはった松に波の打ち寄せる洲浜と、そこに遊ぶ鶴亀を鋳出した文様の蓬萊鏡があらわれてきます。熱田神宮は鎌倉時代より蓬萊宮といい伝えられ、この地は蓬ヶ島として多くの人々の信仰を集めおりました。この信仰により当宮には21面の蓬萊鏡が伝えられています。この鏡は白銅製で中心に菊亀甲文亀鈕を据え、まわりに中線の単圈を回らし、蒲鉾式中縁としたもので、文様は典型的な蓬萊文様です。鏡背には「奉施入 热田大神宮 大宮司刑部少輔満範 応永十九年二月二日」の寄進銘が刻まれています。
(1412)

岡田芳幸 <熱田神宮宝物館学芸員>

「愛知の博物館」No.32

発行日 昭和57年9月

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

<0561> 84-7474